

# 転学を希望する学生とは誰か？

## －「学生の多様化」を不適応学生の地平から捉える－

山田 剛史

(島根大学教育開発センター)

### 1. 問題背景

1990年代初頭の少子化予想に基づく大綱化以降、大学・短大への進学率は急増し、大学全入が目前に迫っている。推薦やAOなど学力試験を必要としない入試形態が急増し、狭義の学力という点で一定の質を担保してきた日本の大学システムは、一部の選抜校を除き事実上解体の道を辿っている。その過程で、広狭学力低下を含む「学生の多様化」が指摘されて久しいが、その実態を把握する根拠データや研究の蓄積は十分であるとは言えない。

### 2. 研究背景①：ハイパーフォーマー学生と不適応学生

筆者は、大学生論の観点から大学生活全体の中での学びや大学教育の問題にアプローチを行ってきた。山田(2009a)では、学生生活類型という観点から学生の学習成果に着目し、様々な学生生活経験に積極的に関与している学生(ハイパーフォーマー(HP)学生)が総じて高い学習成果を有していることが確認されている。類似の結果は、溝上・中間・山田・森(2009)においても示されている。一方、HP学生の多くが入学時には不満足感を感じていることや、逆に満足して入学している学生があらゆる活動に消極的な関与及び低い学習成果を示していることなど、多数の不本意入学者に関する研究知見で概ね指示されてきたリニアな関係が必ずしも当てはまらず、その様相はより複雑なものになってきている。HP学生を分析することで見えてくる理想的な大学生像の解明も重要である一方、不適応的な学生がいかんして生まれ、そこから脱していくのかといった視点に焦点を当てて、さらにそれらを大学教育の文脈で検討していくことが重要であると思われる。

### 3. 研究背景②：不適応学生の実態を「転学希望」から捉える

本研究では、学生の多様化による産物の1つとして考えられる学生の「移動(転学希望)」に着目する。Benesse教育研究開発センターが行った「大学生の学習・生活実態調査」において、4,070名の対象者中694名(17.1%)が「他の大学に入り直したい」に「よくある」と回答している。こうした学生の背景には、入学難易度や進学時の満足度、大学に対する満足度や学生生活の過ごし方など様々な要因が関係していることが考えられる。こうした要因の探求を通じて、ハード・ソフト両面を含めた教育環境の整備・充実ひいては落伍者や退学・転学者の抑制(大学への適応)につながる知見を導き出すことを目的とする。

### 2. 調査の概要

《リソース》 Benesse教育研究開発センター「大学生の学習・生活実態調査」

《対象者》 大学生 4,070名(1年 1,017名, 2年 1,013名, 3年 1,017名, 4年 1,023名)

《実施時期・調査方法》 2008年10月/約80万人より無作為抽出(インターネット調査)

### 3. 結果と考察

#### (1)基礎統計

ここでは、まず5つの観点から転学を希望する学生の割合について示す。

- 学年別…ほぼ同等の比率（1年 16.2%，2年 17.2%，3年 16.0%，4年 18.8%）。
- 性別…ほとんど差は見られない（男性 17.6%，女性 16.2%）。
- 設置形態別…国立で低く 11.8%，私立 18.6%，公立 21.8%と高くなっている。
- 偏差値帯別…高偏差値帯 65 以上で 8.9%と低く，60～64 で 17.1%，50～59 で 15.7%と中程度，49 以下で 21.8%と高くなっている。
- 学部系統別…保健（医歯薬その他）で 13.8%と低く，理工 15.3%，教育 15.4%が中程度，農水産 17.6%，人文科学 17.9%，社会科学 18.9%と高くなっている。

## (2) 転学希望度と進学満足度および大学に対する満足度との関連

次に，転学希望度（4 件法）と現在の大学・学部への進学時満足度（4 件法）および現在の所属大学に対する各種満足度（施設・設備，進路支援体制，教員，授業・教育システム，大学生活総合に対する 5 件法）との関連について相関係数を算出した（N=4070）。

結果，全ての変数が転学希望度と有意（1%水準）に関連していることが示され，値の高い順に，大学生活総合（ $r=-.407$ ），進学時満足度（ $-.382$ ），授業・教育システム（ $-.315$ ），教員（ $-.261$ ），施設・設備（ $-.208$ ），進路支援体制（ $-.207$ ）となっている。

## (3) 学生生活類型に基づく転学希望と学習成果の差異

山田（2009a）と同様，学生生活経験（6 領域）への engagement の程度（5 件法）に基づき，学生生活類型をクラスター分析により 5 クラスター抽出した（下図：N=2340）。全ての活動に消極的な学生群（CL3）は全体の 18.8%を占めている。転学希望者中（N=390），CL3 の占める割合は 74 名（19.0%）で，全体平均（18.8%）と同水準であった。特徴としては，部活重視（CL5）の割合が全体平均（23.1%）より低く（14.4%），アルバイト重視（CL1）の割合が全体平均（15.5%）より高い（21.5%）ことが挙げられる。

そこで，転学希望者の中でも諸活動への傾倒の程度には差異がみられることから，ここでは学習成果の差異について検討を行う。具体的には，転学希望者（N=390）を対象に，5 つのクラスターを独立変数，学習成果（28 項目 4 因子，山田 2009b）を従属変数とした一要因分散分析を行った。その結果，4 因子全て 1%水準で有意差が見られたので，多重比較（LSD 法）を行ったところ，F1「全般的技能」で CL4>(CL2>CL3),CL5>CL1, F2「数的処理」で CL4>CL3,CL5,(CL2>CL1), F3「外国語」と F4「積極的態度」で CL4>CL1,CL2, CL3,CL5 という結果が示された。同じ転学希望者でも活動への傾倒によって得られる成果が異なっており，進学時の満足度を高めるためのマッチング方略を徹底することや学内教育環境を整

備・充実させていくこと，そしてそうした環境の中に学生を巻き込んでいくことが重要であろう。

